

米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謡研究』 についての一考察

石川 薫

A Study of YONEDA Yutarō's “YuanwenDuiyiZhinaTonghuaGeyaoYanjiu”

Kaoru ISHIKAWA

内容提要

到了大正末期，汉语学者米田祐太郎等编辑了有特色的三本汉语课本。这些课本是用支那童话编写的汉语课本。本论文是以通过1925年4月出版的米田祐太郎《原文對譯支那童話歌謡研究》为研究目的，推究了一种大正末期的汉语学者的课本编写方法和态度。为了达成此目标，寻找《原文對譯支那童話歌謡研究》的出典，进行课文和出典的比较。最后查明了米田祐太郎用《兒童世界》等的童话杂志，编写了《原文對譯支那童話歌謡研究》，还指出了他的编写态度。

【キーワード】 米田祐太郎、童話、『兒童世界』、『繪圖童話大觀』

目次

1. はじめに
2. 米田祐太郎の紹介
3. 『原文對譯支那童話歌謡研究』収録「支那童話」
4. 同時代的資料および調査範囲

5. 調査結果
6. 事例
7. おわりに

1. はじめに

大正末期になると、日本において「支那」童話を用いた中国語学習テキストが刊行されるようになる。中でも、米田祐太郎による『原文對譯支那童話歌謡研究』は、中国人児童文学研究者の季穎による『日中児童文学交流史の研究—日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国—』において、「現在の調査で、『(原文対訳) 支那童話歌謡研究』は日本で出版された、中国創作児童文学を翻訳をした最も早い書籍だと見ることができる。なお、収載している作品が中国現代児童文学確立期のものであることも注目すべきである。この二つの意味から、『(原文対訳) 支那童話歌謡研究』は非常に価値ある文献だと思われる。」(季 2010 : 6 頁) と述べられ、非常に高く評価されている。また、季は上記『日中児童文学交流史の研究—日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国—』で、米田による『原文對譯支那童話歌謡研究』中の「支那歌謡」部の出典調査を行った。そして、商務印書館より刊行されていた『児童世界』がその出典元であるとした。

しかしながら、季の出典調査は「支那歌謡」部が中心であり、『原文對譯支那童話歌謡研究』第一部「支那童話」部についての出典調査に関する報告は2話のみが記述されているにすぎない。よって、本稿では「大正時代の支那語学者がどのような資料を用いて中国語テキストを作成したのか」という問題意識に立ち、『原文對譯支那童話歌謡研究』第一部「支那童話」部についての出典調査を行う。そして、季による言及が無かった童話部についての空白部分を埋め、さらには、米田がどのような態度・意識で『原文對譯支那童話歌謡研究』を作成したかについて考察を加えるものである。

結論を先に述べると、米田祐太郎は商務印書館の『児童世界』や『京語童話』シリーズ、世界書局の『繪圖童話大觀』か、もしくは『繪圖童話大觀』に非常に近い関係にある童話集、中華書局『小小説』シリーズ等を手に取って『原文對譯支那童話歌謡研究』を作成した可能性が極めて高い。そして、

米田はそれらの資料をほぼオリジナルのままの形で収載し、テキストを作成したと思われるのである。

2. 米田祐太郎の紹介

明治24年（1891年）9月11日東京生まれ、明治45年（1912年）3月東京外国語学校第13回卒業生である。満鉄、関東庁嘱託などを経て後、著述業に従事し、中国関係書のみを数十冊も世に出した。『和文支那訳研究』、『支那語文法研究』をともに大阪屋号書店から大正11年（1922）に発行し、『支那の商人生活』、『支那商店と商慣習』等を教材社から昭和15年（1940）に出版している。

3. 『原文対訳支那童話歌謡研究』収録「支那童話」

米田祐太郎による『原文対訳支那童話歌謡研究』支那童話部に収録された支那童話は以下のものである

中国語タイトル	日本語訳タイトル
①商神和樵夫	商神と樵夫
②審石頭	石の裁判
③鐘淵	鐘ヶ淵
④黒面女	黒面の女
⑤捉鍾馗	鍾馗を捉へる
⑥長面孔	長面怪
⑦小人國	小人國
⑧崑崙山和泰山の談話	崑崙山と泰山の話
⑨猿島王	猿島王
⑩陰陽鐘	陰陽鐘

4. 同時代的資料および調査範囲

辛亥革命以前の清朝期においても「童話」に関する書籍・雑誌は出版されていたが、中華民国になると商務印書館などを中心に「童話」に関する書籍・雑誌の刊行数は大きく増加する。中華民国において、定期的に刊行する

児童雑誌として最初に発売され、児童雑誌の代表的なものには商務印書館『児童世界』¹⁾がある。よって、本論ではまず『児童世界』を中心に『原文對譯支那童話歌謡研究』に収録された童話の有無を確認する。

さらには、『原文對譯支那童話歌謡研究』が出版された2年後の昭和2年(1927年)に、及川恒忠²⁾による『世界童話大系第十五卷支那・臺灣篇』(昭和二年(1927年)三月、世界童話大系刊行会)³⁾が発行されるのだが、その中には「崑崙山と泰山の對話」、「石裁判」、「黒面の女」、「閻魔と鍾馗」、「驢太子」、「面長鬼」という童話が収録されている。これらはそれぞれ、『原文對譯支那童話歌謡研究』中の「崑崙山和泰山の談話」、「審石頭」、「黒面女」、「捉鍾馗」、「陰陽鐘」、「長面孔」と同一の話である。及川が『原文對譯支那童話歌謡研究』を目にしたかは定かではないが、『世界童話大系第十五卷支那・臺灣篇』のはしがきに、「筆者は這の小さな一編を作出すに當つて、あまり多くではありませんが、相應の、古い文献を漁りました。併し翻譯に用ひた原本は大部分やさしく書かれてある新しい書物に態とよつたのです。それは筆者にとって便利でもありましたし、世界童話大系の一部として出版する為には、却つて適當な材料だと想つたからです。商務印書館や中華書局や世界書局やで近年一と曰つても民國八九年以來一盛んに發刊されてゐる「小小説」とか「中國童話大全」とかの類です」と記されている。この記述は米田祐太郎が用いた資料を推察していく上で重要な情報となる。つまり、民國8年(1919年)前後に商務印書館、中華書局、世界書局といった出版社においては盛んに童話が刊行されており、『小小説』や『中國童話大全』と言った童話集を日本人である及川恒忠が入手していた事実を物語っている。そうであれば、米田祐太郎も及川恒忠と同じような支那童話集を入手し、使用したとしても不思議ではない。

¹⁾『児童世界』刊行後、ライバル誌として中華書局より『小朋友』が刊行される。

²⁾及川恒忠は1890年9月岩手県に生まれ、1908年に慶応義塾大学部予科第一学年に入学し、1913年に慶応義塾大学部政治科を卒業する。1917年、義塾留学生に選ばれると、中国で2年、フランスで1年過ごし、1920年に帰国する。英語、フランス語、中国語を上手く操った。及川は当時の中国の政治制度や社会情勢に明るく、中国の社会主義思想や共産党の活動について、最も詳しい日本人の一人であった。1959年1月に死去した。

³⁾本論では、平成元年(1989年)名著普及会による復刻版を参照した。

よって本論ではまず『児童世界』（商務印書館）を調査し、次に商務印書館、中華書局、世界書局などから刊行された童話集を調査対象とする。

5. 調査結果

童話名	収録雑誌など
①商神和樵夫	『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊 ⁴⁾
②審石頭	『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』第一冊
③鐘淵	『児童世界』第一卷第十三期、商務印書館 中華民國11年4月
④黒面女	『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊
⑤捉鍾馗	『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊
⑥長面孔	『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊
⑦小人國	『児童世界』第一卷第七期、商務印書館 中華民國11年2月
⑧崑崙山和泰山的談話	『繪圖童話大觀第一種 兒童物語』第一冊
⑨猿島王	(商務印書館『京語童話』「第五編猿島」：未見 ⁵⁾)
⑩陰陽鐘	(『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊 ⁶⁾) (中華書局『小小説』「陰陽鐘」：未見)

以上のように、童話全10話中、8話の出典が明らかとなり、米田祐太郎が中華民國において刊行された童話集・童話雑誌を用いて、その中国語学習テキストである『原文對譯支那童話歌謡研究』を作成したとするのは十分うなずける。

次項に『原文對譯支那童話歌謡研究』童話部本文および発見することができた出典と思しき文章を記す。なお、紙幅の関係から全ての話を取り上げることは不可能であるため、本論文では数話のみを紹介する。

⁴⁾『繪圖童話大觀第一種 兒童物語』、『繪圖童話大觀第二種 兒童故事』、『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』、すべて中華民國十年、上海世界書局發行である。

⁵⁾商務印書館『京語童話』に「第五編猿島」が存在する。筆者未見。

⁶⁾中華書局『小小説』にも「陰陽鐘」が存在する。筆者未見。『原文對譯支那童話歌謡研究』本文と『繪圖童話大觀』では文章が大きく異なる。よって、『小小説』「陰陽鐘」を米田は参照した可能性がある。

6. 事例

6.1 『児童世界』が出典であるもの

季穎は『日中児童文学交流史の研究—日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国—』において、「童話の部分も「小人国」という話は『鄭振鐸と児童文学』に収載された鄭振鐸の作品と一致することで、出典が判明した。「鐘淵」というお話は「児童世界」第1巻第13期に掲載された作品とタイトルが同じなので、「児童世界」の現物は未見だが、『(原文対訳)支那童話歌謡研究』に収録されている作品に「児童世界」からのものが多いことから、「鐘淵」は「児童世界」第1巻13期に掲載されたものと判断する」(季2010:6頁)と述べている。

季は「現物は未見」であり、『児童世界』に「鐘淵」、および、「小人國」が収載されているかは不確かである。よって、『児童世界』の現物を確認する必要がある。そこで、筆者が実際に『児童世界』現物を調査したところ、季が述べている通り、確かに「鐘淵」と「小人國」は『児童世界』に収録されていた。以下に資料として、米田『原文對譯支那童話歌謡研究』本文と、その本文と同一である個所に下線⁷⁾を引いた『児童世界』の文章を記載する。なお、ここでは「鐘淵」のみを取り扱う。

「鐘淵」(本文)

從前有一個村莊，在一個小湖的周圍。這個村莊很富，無論怎樣貧苦的百姓，他們所有的金錢，差不多都要車載斗量的。可是這個村上的人們，金錢一到了手，再不想用出去，那自然就會積蓄起來了。但是無論什麼時候，要是積蓄的錢太多了，也是不好的，村中的人們，就漸漸兒學得奢華起來了。一個人造了華麗的房屋，非常自慢，於是大家都模倣他，也造起好看的房屋 還要喝酒，每天從早晨到晚上，祇是遊蕩着過日子，一些事情也不做，連那到寺廟裏去禱告拜佛的人，也沒有了。

村中有一個寺廟，突出於小湖當中，都是用石頭造成功的，可算是一個極好看的建築物。那些嫌惡參拜的，喜歡奢華的村人，大家商量道，我們難道沒

⁷⁾ 以降、本論では本文と同一文章に下線を引いて示す。

有方法把這個寺廟做得更好看嗎，於是就用黃金來裝飾這個寺廟的外面，便變成光輝燦爛的一個極美麗的寺廟了。於是大家商量道

『現在這個寺廟雖是已經美麗了，但是寺廟裏的鐘，還嫌太小，不很好看我，們必須用黃金來造一個大鐘，敲起來使他的聲音響到全村，難到我們沒有方法做到嗎』

那歡喜奢華的村人，看金子是很輕的，所以立刻就贊成造一個黃金的大鐘。

村中的人，請了一個他們國度裏頂內行的打金的工匠，完全用金子來造一個大鐘。造好之後，看起來實在美麗，被太陽光照着的地方，十分輝耀，好像火燒似的，有一天，村中的富翁，駕了花車，把這個鐘運到寺廟裏去，把他掛上鐘樓。村中的人，都來祝賀，大家都準備着，聽這初撞的鐘聲。他們想起來，鐘的聲響，一定要響到全村了。大家都等候着，聽他響出來。

這一天，無論村裏的什麼人，都聚集攏來，大家都到寺廟裏去。寺廟裏的和尚，便把鐘撞起來，撞木已經振動了，但是鐘聲絲毫沒有響出來，撞了幾撞還是不響，村中的人，大家都呆着了。

村中的人，等了許久，那鐘的聲音，到底沒有響出來，大家都說道，奇怪，奇怪，便相率而歸去了。剩下幾個照料的人，大家商量道『這個鐘一些也不好，明天我們要棄掉他，把他投到湖裏去』

到了明天，村中的人，又大家擁擠着到寺廟裏去了。那一天，大家眼看這鐘的沈沒，大家都唱着有趣味的送鐘沈沒的歌，婦人小兒，哄然相聚，廟的內外，都充滿着人了。

寺廟裏的和尚大家到鐘樓上去，豫備脫下那個鐘，忽然之間，那鐘自己響起來了。而且他的聲音也一刻一刻的高起來了，好像幾百個雷聲一齊響起來好像那鐘已經爆裂似的。村中的人，正在駭怪正在騷動的時候，忽然有旋風吹來，把寺廟啊，人啊，鐘啊，一齊都沉到湖裏去了。

剩下來沒有死的幾個人，從此以後，什麼工作也不想做了，只是遊蕩着過日子，從來也就一人，兩人的慢々の死去了，死得一個也不剩。

那沈沒在湖裏的鐘，還是不絕的響，直到現在夜深的時候，要是有人在湖邊上走着，還可以聽到這可哀的聲音，在湖底裏響。聽到這聲音的人，沒一個不是這樣想。

『奢華是不可以的，懶惰也是不可以的』

『兒童世界』（第一卷第十三期より）「鐘淵」

從前有一個村莊，在一個小湖的周圍。這個村莊很富，無論怎樣貧苦的百姓，他們所有的金錢，差不多都要車載斗量的。可是這個村上的人們，金錢一到了手，再不想用出去，那自然就會積蓄起來了。但是無論什麼時候，要是積蓄的錢太多了，也是不好的，村中的人們，就漸漸兒學得奢華起來了。一個人造了華麗的房屋，非常自慢，於是大家都模倣他，也造起好看的房屋；還要喝酒；每天從朝晨到晚上，祇是遊蕩着過日子，一些事情也不做，連那到寺廟裏去禱告拜佛的人，也沒有了。

村中有一個寺廟，突出於小湖當中，都是用石頭造成功的，可算是一個極好看的建築物。那些嫌惡參拜的，喜歡奢華的村人，大家商量道：我們難道沒有方法把這個寺廟做得更好看嗎？於是就用黃金來裝飾這個寺廟的外面，便變成光輝燦爛的一個極美麗的寺廟了。於是大家再商量道：

『現在這個寺廟雖是已經美麗了，但是寺廟裏的鐘，還嫌太小，不很好看，我們必須用黃金來造一個大鐘，敲起來使他的聲響到全村；難道我們沒有方法做到嗎？』

那歡喜奢華的村人，看金子是很輕的，所以立刻就贊成造一個黃金的大鐘。

村中的人，請了一個他們國度裏頂內行的打金的工匠，完全用金子來造一個大鐘。造好之後，看起來實在美麗，被太陽光照着的地方，十分輝耀，好像火燒似的。有一天，村中的富翁，駕了花車，把這個鐘運到寺廟裏去，把他掛上鐘樓。村中的人，都來祝賀，大家都準備着，聽這初撞的鐘聲。他們想起來，鐘的聲響，一定要響到全村了。大家都等候着，聽他響出來。

這一天，無論村裏的什麼人，都聚集攏來，大家都到寺廟裏去。寺廟裏的和尚，便把鐘撞起來，撞木已經振動了，但是鐘聲絲毫沒有響出來，撞了幾撞，還是不響。村中的人，大家都呆着了。

村中的人，等了許久，那鐘的聲音，到底沒有響出來，大家都說道：奇怪！奇怪！便相率而歸去了。剩下幾個照料的人，大家商量道：『這個鐘一些也不好，明天我們要棄掉他，把他投到湖裏去。』

到了明天，村中的人，又大家擁擠着到寺廟裏去了。那一天，大家眼看這鐘的沈沒，大家都唱着有趣味的送鐘沈沒的歌；婦人小兒，哄然相聚，廟的內外，都充滿着人了。

寺廟裏的和尚，大家到鐘樓上去，豫備脫下那個鐘，忽然之間，那鐘自己響起來了；而且他的聲音也一刻一刻的高起來了，好像幾百個雷聲一齊響起來，好像那鐘已經爆裂似的。村中的人，正在駭怪，正在騷動的時候，忽然有旋風吹來，把寺廟啊，人啊，鐘啊，一齊都沈到湖裏去了。

剩下來沒有死的幾個人，從此以後，什麼工作也不想做了，只是遊蕩着過日子，後來也就一人，兩人的慢慢的死去了，死得一個也不剩。

那沈沒在湖裏的鐘，還是不絕的響，直到現在夜深的時候，要是有人在湖邊上走着，還可以聽到這可哀的聲音，在湖底裏響。聽到這聲音的人，沒一個不是這樣想：

『奢華是不可以的，懶惰也是不可以的。』

（『兒童世界』第一卷第十三期、商務印書館、中華民國11年4月）

以上のように2つの文章を比較すると、米田は『兒童世界』の文章を大きく変更することなく自身のテキストに採用したことが容易に理解できよう。このような点からも、『兒童世界』がその出典である可能性が高いことは言うまでもない。

また、ここでは記述は省略するが、『兒童世界』がその出典と考えられる「小人國」も、「鐘淵」と同じく『兒童世界』の文章によったものであることは明らかである。

6.2 『繪圖童話大觀』が出典元らしきもの

「商神和樵夫」、「審石頭」、「黒面女」、「捉鍾馗」、「長面孔」、「崑崙山和泰山的談話」の話は『繪圖童話大觀』がその出典元だと考えられる。これら『繪圖童話大觀』が出典と思しき話についても、米田は『兒童世界』中の「鐘淵」や「小人國」と同じように、ほぼオリジナルのままの形で自身の『原文對譯支那童話歌謡研究』に収めている。しかしながら、「商神和樵夫」、「審石頭」の2つは『繪圖童話大觀』と比較すると本文が多少削られている。

また、「陰陽鐘」は『繪圖童話大觀』には「驢頭太子」というタイトルであるが、内容的には同一の話であることが確認できた。しかし、両話は文章の長さが甚だしく違うなど大きく異なっており、支那童話原文を大きく変え

ることなく『原文對譯支那童話歌謠研究』に収録するという態度を示した米田が、『繪圖童話大觀』中の「驢頭太子」に対してのみ自身で大きく文章を補足したとは考えにくい。よって、「陰陽鐘」は『繪圖童話大觀』ではないものを参照したと考えられる。なお、筆者は未見だが、中華書局『小小説』内にも「陰陽鐘」が存在する。タイトルだけで判断するのは非常に危険ではあるが、米田は中華書局『小小説』シリーズ「陰陽鐘」を参照した可能性が高いことをここで指摘しておきたい。

参考のため、以下に「商神和樵夫」、「黒面女」各本文と『繪圖童話大觀』の文章を記載する。

「商神和樵夫」（本文）

話說一個樵夫，有一天手裏拿着一把斧頭，在河邊斫樹。不知怎麼不留心，那斧頭脫手落到河裏去了。

這樵夫很是爲難，要想拾沒有法子，只好在河邊哭，哭了一會，剛巧管這河的主人走來。問他哭什麼。樵夫就把斧頭脫落的情形告訴他。

商神聽了這話，便攢到水裏拾得一把金的斧頭，問樵夫道『這把斧頭備的麼』

樵夫說不是。商神又攢到水裏，拾得一把銀的斧頭。問樵夫道『這把斧頭是備的』

樵夫又說不是。商神再攢到水裏，把樵夫所失的原斧頭拾來，問樵夫道『這把斧頭是備的麼』

樵夫很快活的說『是的』

商神以爲這人老實，便把金的和銀的二把斧頭給他。

樵夫回來，告訴他的朋友，得了金斧和銀斧頭的原因。這位朋也想得這些寶貝，便到這河邊斫樹，故意把斧頭脫落河裏。也坐在河邊哭。

商神也走到他面前，問他哭甚麼，這位朋友就把丟了斧頭的話告訴他。商神急忙攢到水裏，拾得一把金的斧頭。問這朋友道『這把斧頭是備的麼』

這位朋友說『是，這是我的』

商神便罵道『謊話，不特不給備，就是備的原斧頭也不給備了』

『繪圖童話大觀』「商神和樵夫」

話說一個樵夫，有一天手裏拿了一把斧頭，在河邊斫樹；不知怎麼不留心，那斧頭脫手落到河裏去了。

這樵夫很是爲難，要想洽沒有法子，只好在河邊哭，哭了一會，剛巧管這河的主人走來，問他哭什麼？樵夫就把斧頭脫落的情形告訴他。

商神聽了這話，便攢到水裏拾得一把金的斧頭，問樵夫道：「這把斧頭是你的麼」？

樵夫說不是，商神又攢到水裏，拾得一把銀的斧頭；問樵夫道：「這把斧頭是你的麼」？樵夫又說不是，商神再攢到水裏，把樵夫所失的原斧頭拾來，問樵夫道：「這把斧頭是你的麼」？

樵夫很快活的說：「是的」。

商神以爲這人老實，便把金的和銀的二把斧頭給他。

樵夫回來，告訴他的朋友，得了金斧頭和銀斧頭的原因。這位朋友也想得這些寶貝，便到這河邊斫樹，故意把斧頭脫落河裏；也坐在河邊哭。

商神也走到他面前，問他哭什麼？這位朋友就把丟了斧頭的話告訴他，商神急忙攢到水裏，拾得一把金的斧頭；問這朋友道：「這把斧頭是你的麼」？

這位朋友說：「是！這是我的」。

商神便罵道：「謊話！不特不給你，就是你的原斧頭也不給你了」。

小朋友！做人老實好呢？還是欺騙好？看這段故事，就明白他的結果了。（『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊，中華民國十年，上海世界書局）

「黑面女」（本文）

秋英一個人登在觀音廟裏，嘆氣道『天呀，怎麼生我這樣醜呢，既然麻子，又要生瘤』

話還沒有說完，忽然吹起一陣怪風，走來一個披髮黑面的女人，說道『你嫌醜麼，只要我給爾三滴水，就會變成一個美麗的女子了』

秋英嚇得心戰膽驚，既然到了這裏，也無可如何了。就接着說到『你有這樣能力麼，請爾把三滴水給我罷』

黑面女道『且慢，我還有句話告訴你。三滴水，一滴是擦面的，一滴是擦

瘤的，一滴是吃的』

說罷就給秋英，秋英照黑面女所說的做去，立刻變做嬌艷的美女了。秋英的名，一時傳遍全國。

這國裏的國王，生起病來了。請來了一位醫生，這醫生看了病勢，說道『這病沒有法子可以治得，只有拿美女的心肝煎來做湯，纔可全愈』

國王就叫手下四下裏找尋美女，將要尋到秋英家裏了。秋英就在半夜裡，仍舊到觀音廟去躲避。忽然黑面女進來了，秋英立刻跪下，連叫『救命……救命……快還我原身，否則，我就要死了』

黑面女道『從前嫌貌醜，如今嫌貌好麼』

見秋英哀求可憐，便拿三滴水，叫他照前法做去。過了一會，秋英立刻化轉原身了。

『繪圖童話大觀』「黑面女」

秋英一個人登在觀音廟裏，嘆氣道：『天呀！怎麼生我這樣醜呢？既然麻子，又要生瘤』

話還沒有說完，忽然吹起一陣怪風，走來一個披髮黑面的女人，說道：「你嫌貌醜麼」？只要我給你三滴水，就會變成一個美麗的女子了」

秋英嚇得心戰膽驚，既然到了這裏，也無可如何了。就接着說道：「你有這樣能力麼？請你把三滴水給我罷」！

黑面女道：「且慢！我還有句話告訴你。三滴水；一滴是擦面的，一滴是擦瘤的，一滴是吃的」。

說罷就給秋英，秋英照黑面女所說的做去，立刻變做嬌豔的美女了。秋英的名，一時傳遍全國。

這國裏的國王，生起病來了。請來了一位醫生，這醫生看了病勢，說道：「這病沒有法子可以治得，只有拿美女的心肝煎來做湯，纔可全愈」。

國王就叫手下四下裏找尋美女，將要尋到秋英家裏了。秋英就在半夜裡，仍舊到觀音廟去躲避。忽然黑面女進來了，秋英立刻跪下，連叫「救命……救命……快還我原身，否則，我就要死了」！

黑面女道：「從前嫌貌醜，如今嫌貌好麼」？

見秋英哀求可憐，便拿三滴水，叫他照前法做去！過了一會，秋英立刻化

轉原身了・

（『繪圖童話大觀第三種 兒童神話』第一冊，中華民國十年，上海世界書局）

7. おわりに

以上のように、米田祐太郎は『原文對譯支那童話歌謠研究』を作成する際、『兒童世界』のような中華民國で発行された各種童話雑誌等を用いて、その『原文對譯支那童話歌謠研究』を編集したことは信憑性が極めて高い。また、米田の基本的な姿勢としては、出典元である文章に手を加えることなく使用し、そして独自の『原文對譯支那童話歌謠研究』を作り上げた、ということを指摘できよう。

つまり、米田祐太郎のテキスト作成方法を一つの例とするならば、大正末期の支那語学者は中華民國で出版された同時代の資料をいち早く取り入れながら、オリジナルである出典元の文章を重要視し、ほぼそのままの形で使用しつつ支那語学習童話テキストを作成した、と考えられる。

本論では米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謠研究』のみを研究対象としたが、大正末期には矢野藤助⁸⁾による童話テキストも刊行されている。大正末期に刊行された支那語学習童話テキストの全体像を把握し、この動きを適切に中国語教育学史に位置づけるためにも、矢野藤助のテキストについての分析を行う必要がある。

また、これら支那語学習用童話テキストを語学テキストとしてではなく、支那童話集として見るならば、「戦前の支那語学者と支那童話集の関係」といった点からの日中児童文学関係史の新たな1ページを開くことができるものである。これら矢野藤助の支那語学習童話テキストの分析や、児童文学史との関連についての研究は今後の課題としたい。

【参考文献】

・及川恒忠・西岡英夫『世界童話大系第15巻支那・台湾篇』、1927年3月原本発行、

⁸⁾ 矢野藤助は東京外国語学校を明治44年（1911）に卒業した第12回卒業生の1人であり、米田の1年先輩である。大正13年（1924年）に『日支對譯支那童話集』、翌年に『華語童話讀本』を刊行する。

1989年2月復刻版発行、名著普及会

- ・ 季穎、『日中児童文学交流史の研究—日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国—』、2010年2月、風間書房
- ・ 陳和祥、孫志勁編、陸翔校訂『繪圖童話大觀—兒童物語、兒童神話、兒童故事』、中華民國10年（1921年）、上海世界書局
- ・ 鄭振鐸編『兒童世界』第1卷第7期、1922年2月、上海商務印書館
- ・ 『兒童世界』第1卷第13期、1922年4月、上海商務印書館
- ・ 東京外国語大学史編纂委員会『東京外国語大学史—独立百周年（建学百二十六年）記念』、1999年、東京外国語大学
- ・ 鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』、2001年、ミネルヴァ書房
- ・ 野中正孝『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』、2008年、不二出版
- ・ 米田祐太郎『原文對譯支那童話歌謡研究』、1925年4月、大阪屋號書店
- ・ 六角恒廣『近代日本の中国語教育』、1984年、不二出版
- ・ 『中国語教育史の研究』、1988年、東方書店
- ・ 『中国語書誌』、1994年、不二出版
- ・ 『中国語関係書書目（増補版）』、2001年、不二出版